

妊婦を対象とした地域子育て支援に関する研究

—マタニティ・プラネタリウムの効果から—

松井 剛太・水津 幸恵*

(家政教育) (附属幼稚園)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

*762-0031 坂出市文京町1-9-4 香川大学教育学部附属幼稚園

The Research of Community Parenting Support Program by Planetarium for Pregnant Women

Gota Matsui and Sachie Suizu*

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**Kindergarten Attached to the Faculty of Education, Kagawa University,*

1-9-4 Bunkyo-cho, Sakaide 762-0031

要 旨 本研究の目的は、妊婦を対象とした地域子育て支援について、マタニティ・プラネタリウムの効果から検討することであった。ストレス解消につながるものを解消型、知識や技能の獲得につながるものを獲得型として検討した結果、プラネタリウムの活用が解消型、獲得型の両面から効果があることが示唆された。また、マタニティ・プラネタリウムの取り組みが子育て支援へのアクセシビリティを高める一つの方策として提起された。

キーワード プラネタリウム, 妊婦, リラックス

I. 目的

(1) 地域子育て支援の現状と課題

20年ほど前から発展してきた地域子育て支援は、それまで事実上母親の責任とされてきた子育てという領域に社会的責任があることを周知した(山縣, 2010)。そして現在に至るまで、子育て支援に関する様々な実践や学術研究が進められている。特に地域で行われている子育て支援は急速に拡充し、子育てをしている家庭を対象に多様なサービスが提供されている(澤津ら, 2010; 石橋, 2011; 堀口, 2010)。こういっ

た量的拡充は支援の選択肢を広げるという点においては大きな意味を持つ。しかし、近年では本当に支援が必要な人は子育て支援の場に来ないことも課題とされており、選択肢を広げるだけでは限界がある。これからは、支援の必要な人が参加しやすく、かつ効果的に支援が行われる形態を考えなければならない。

上記の点について、地域子育て支援が有している機能的側面から論じる。これまでの地域子育て支援を概観すると、その目的は2つに大別できる。本研究では、それを次のように定義する。第1に、子育てひろばなどの場を設定する

ことを通して、参加者が仲間を見つけたり、悩みを話したりすることによってストレスを解消することを目的としているものを「解消型」、第2に、子育てに関する講演会やセミナーなどの開催により、参加者が知識や技能を獲得することを目的としているものを「獲得型」とする。参加者の求める支援が子育て支援の目的と合致していなければ参加は促されず効果も高まらないだろう。さらに、難しいのは「解消型」と「獲得型」が不可分なことである。例えば、子育てひろばは、主に「解消型」の子育て支援と考えられているが、スタッフや仲間と話をすることで知識や技能を獲得する「獲得型」の機能も有している。このように考えると、すべての子育て支援策は、「解消型」、「獲得型」の両面の機能を内包しているが、そこで得られる効果は参加者の感受性に依存していると言える。これはつまり、子育て支援を提供する側は、「解消型」を意図して支援を提供したとしても、参加者によっては、「獲得型」の支援を受けたと知覚される場合もあるということである。Barrera (1986) によれば、ソーシャルサポートとは、実質的に受けたサポートだけでなく、「他者からの援助に対する参加者の主観的評価」という知覚的なサポートも含んでいると言う。この考えに依拠すると、提供する側は意図していなかったが、結果的に参加者が支援を受けたと知覚すれば支援になっていると考えることができる。

以上の議論から、支援の必要な人が参加しやすく、かつ効果的に支援が行われる形態として次のことが言える。第1に、支援を提供する側が子育て支援の持っている潜在可能性を把握することである。実施している子育て支援の主機能だけでなく、副次的に参加者に知覚されうる支援まで把握しておくことによって、参加者のニーズに応じた幅広い支援が可能になる。第2に、「支援の押し売り」を避けた情報提供をすることである。支援の必要な人は二重のストレスを感じていると言われる。これは、悩みに対するストレスとその悩みを解消するために支援を受けなければならない状況に対するストレス

を示す。後者のストレスを強く感じる場合、解決したい気持ちはやまやまだが、支援されることには抵抗感が生じるというジレンマに陥る。このことが「本当に支援が必要な人は子育て支援の場に来ない」という課題が生まれる一因となっている。

この点においては、表向きは単純に楽しむことや落ち着くことなどを目的としておいて、結果的に支援を感じるような取り組みを実施できれば、参加への抵抗感は軽減されて、かつ効果的な支援が実施できると考えられる。

本研究では、以上を踏まえたうえで地域子育て支援の取り組みを分析し、今後の展望を述べたい。

(2) 妊婦を対象とした地域子育て支援の必要性

本研究では、出産前の妊婦に対する支援を検討する。これまでの地域子育て支援において、妊婦に対する支援は、医学的に分娩のリスクが高い場合や多胎児など出産後に困難が予想される場合など特定の状況に対応するものが多く、すべての妊婦を対象にしたものは少ない。しかし、妊娠期に周囲からの支援が充実しているほうが、出産後赤ちゃんに対して肯定的な行動をとる傾向にあることが指摘されているように(堀口, 2005)、妊婦に対する支援は長期的に見て大きな価値がある。では、妊婦に対してどのような支援が求められるだろうか。

まず、「解消型」の視点から考えると、ストレス解消がある。妊婦が妊娠に伴うホルモンバランスの乱れにより、情動が不安定になり、精神活動面の不適応症状が出やすいことは古くから一般的に知られている(長谷川, 1968)。また産後1年時に抑うつが続いている者は、妊娠中か産後5週に抑うつであったことがわかっており(安藤ら, 2008)、妊娠期のストレス解消は出産後の母親の精神面にも有効である。

次に、「獲得型」の視点から考える。主には出産・育児に関する情報獲得が考えられるが、既に雑誌やインターネットなどで情報過多の状態である。そういった知識よりもむしろ、妊娠

期は母親になる心構えを形成していく時期ととらえたい。つまり、獲得型の視点としては、母親役割の獲得を含める。Rubin (1984) は、妊娠期を母親役割獲得過程の準備段階と位置付けている。Rubinによると、妊娠期の母親役割獲得は、自分と子どもとの状況を空想する中で子への愛着を高め、母親としての自己像を形成していくプロセスにより行われるとしている。空想はかつては現実逃避の行為として否定的にとらえられていたが、現在はその効果が報告されている。Person (1995) は、将来の状態を内的にシミュレーションすることによって、現在と未来を関連付ける効果があることを指摘している。このように、母親となった自分を空想する機会を作ることによって、母親役割の獲得を促すことが可能になると考えられる。

以上のように、妊娠期の子育て支援は、妊娠中だけでなく産後の子育てにおいても重要である。子育て支援の出発点として、妊婦を対象にした支援を地域資源の活用によっていかに創生していくかは、今後の地域子育て支援の重要な視点の一つになるだろう。

(3) プラネタリウムの活用を通じた子育て支援

現在、多くの地域でマタニティ・プラネタリウムと題して、妊婦を対象とした子育て支援が実施されている。マタニティ・プラネタリウムは、プラネタリウムを使用し、妊婦やその配偶者などを対象に実施されているプログラムである。マタニティ・プラネタリウムが広がりを見せたのは、2004年にNHKで長野県佐久市の取り組みが放映されたことがきっかけであった(片岡, 2004)。長野県佐久市では、助産師会が中心となって、妊婦のリラクゼーションを目的に、星の誕生の話、お腹の赤ちゃんの話、星空観賞を中心にプログラムを構成して実施した。その後、マタニティ・プラネタリウムは、各地で様々な内容で取り組まれている。

本研究でプラネタリウムに着目する理由は、次の3点である。第1に、各地の児童館や科学館に常設されている場合が多いため、地域資源

として活用しやすいことである。さらに、児童館や科学館は、子育て家庭に対するイベントが多く行われており、産後に子どもを連れて再訪する波及効果も期待できる。第2に、妊婦が完全に受け身の状態で参加できることである。これまでの子育て支援の取り組みは、話をするにせよ知識を得るにせよ、何らかの形で主体的に関わる必要があるであった。プラネタリウムは、着座した体勢で星を見るだけであり、何も考えなくても寝てもよいため、自由度が高い分気楽に参加できる。それによって、心を落ち着かせる効果が期待できる。第3に、非現実的な空間で星という神秘的なものを鑑賞することである。現実的な制約から離れて謎めいたものを鑑賞する体験は、空想を促すことが示唆されている(村上ら, 2009)。こういった環境的要因に加え、プラネタリウムの上映プログラムに母親役割に関連するようなプログラムを組み込むことで、赤ちゃんや母親になった自分を空想する機会をつくることが期待できる。このように、プラネタリウムの活用は、地域資源としての活用性や妊婦に対する「解消型」、「獲得型」の支援の実行性から見て、大きな潜在可能性があると思われるが、これまでプラネタリウムの活用による子育て支援の効果を検討した研究は見られない。

(4) 分析の視点と目的

本研究では、上記の議論を踏まえたうえで、マタニティ・プラネタリウムに参加した妊婦がどのような効果を知覚したのか検証することを目的とする。分析は、参加した妊婦が、①リラックスできたか(解消型)、②赤ちゃんや母親としての自分を空想できたか(獲得型)という視点で、その理由も合わせて検討する。そして、妊婦を対象とした地域子育て支援の展開に向けて資料を提示する。

II. 方法

(1) 研究対象

K県内の児童館で2010~2011年の間で2回行

われたマタニティ・プラネタリウムに参加した妊婦50名を研究対象とした。

マタニティ・プラネタリウムの構成は、片岡(2004)を参考に、第1部に妊婦の生活や子育てに関する専門家の話、第2部にプラネタリウム鑑賞とした。プログラムについては、松井ら(2011)に詳述している。なお本研究では、プラネタリウムの効果検証を目的とするため、分析の対象とするのは、第2部のプラネタリウム鑑賞である。

(2) 調査内容と分析方法

マタニティ・プラネタリウムの実施後、参加者にアンケートを行った。アンケート項目は、①プラネタリウムの内容について、②マタニティ・プラネタリウムに参加した感想、の2つである。いずれも自由記述で回答してもらった。

分析は筆者2名の協議のもとで行った。分析方法は、KJ法(川喜田, 1970)を参考に以下の手順で行った。まず、自由記述の内容をすべて書き起こしたうえでカード化した。次に、すべてのカードを概観し、リラックスに関わる記述(以下、リラックス記述)と赤ちゃんや母親としての自分の空想に関わる記述(以下、空想記述)を抽出し、数値化した。最後にそれぞれの理由について類似するものを分類し、カテゴ

リー化した。そのような手順のもと、マタニティ・プラネタリウムの効果について解釈した。

Ⅲ. 結果と考察

アンケートは妊婦43名の回答を得た(回収率86%)。なお、質問によっては一部欠損があるほか、一人につき、複数のリラックス記述、空想記述が抽出されている場合もあるため、回答人数と回答数の合計は一致していない。以下、結果と考察を述べる。

(1) 記述の抽出とカテゴリー化

自由記述から、「リラックス記述」と「空想記述」を抽出し、数値化した。リラックス記述が28個、空想記述が27個抽出された。そして、それぞれリラックスできた要因、赤ちゃんや母親としての自分を空想できた要因について類似するものを分類し、カテゴリー化した(表1, 表2)。

まず、リラックス記述の分類からリラックスできた要因について検討する。リラックス記述は、「星」、「音楽」、「企画全体」、「夫婦参加」、「妊婦」の6つに分類された。もっとも多かったのは、「星」、「音楽」、「企画全体」で、それぞれ8つの記述が当てはまった。「星」は、星を眺めることでリラックスできたとするもので

表1 リラックス記述の分類結果

カテゴリー	数	内 容	記 述 例
星	8	星を見たため	星をゆっくり見ていると、心がゆったりして気持ちよかったです。
音 楽	8	音楽がよかったため	音楽が流れてとてもいやされました。
企画全体	8	全体的な企画内容や雰囲気のため	普段なかなか体験できないリラックスできる時間がもてました。またどんどんこのような企画を催してください。
夫婦参加	2	夫婦で参加できたため	リラックスできた。優しい気持ちになれた。夫婦で参加できてよかった。
妊 婦	1	他の妊婦を見て安心したため	普段の生活の中でこんなにたくさんの妊婦さんに出会えることがないので、自分と同じようにお腹の大きい人を見て何か安心したというか、不安とかしんどさが少し和らいだ気がします。
赤ちゃんの動き	1	お腹の赤ちゃんが動いたから	ずっと赤ちゃんがおなかをけていたので、とてもリラックス出来ていたと思います。

ある。プラネタリウム特有の要因であり、プラネタリウム活用によるリラクスの意義が示唆された。「音楽」は、プラネタリウム鑑賞中に流れる音楽により、リラクスできたとしたものである。プラネタリウムによる星の鑑賞だけでなく、音楽の構成もリラクスを促す重要な要因と考えることができる。「企画全体」は、特段一つのことを要因となっているわけではなく、企画そのものや全体的な企画内容・雰囲気によって、リラクスできたとするものであった。記述の中には、妊婦対象の企画への奨励や今後の参加意欲についても見られた。あとは、夫婦で参加したことによるもの、他の妊婦を見て安心したもの、赤ちゃんの動きであった。

次に、空想記述の分類から赤ちゃんや母親としての自分を空想できた要因について検討する。空想記述は、「赤ちゃん写真」、「星座」、「企画全体」、「赤ちゃん話」、「赤ちゃんの動き」の5つのカテゴリーに分類された。最も多かったのは「赤ちゃん写真」で8つの記述が該当した。これは、プラネタリウムの中で、赤ちゃんのスライドショーや赤ちゃんの絵を見せた場面を指している。背景が星空の中に赤ちゃんの写真や絵を表示したものであるため、空想のきっかけになったと考えられる。「星座」と「企画全体」がそれぞれ6つ該当した。「星座」では、夜空が見える空間の中で気持ちが落ち着き、かつ家族をテーマにした星座の話によって赤ちゃんへの思いを深めるきっかけとなっている。「企画全体」は、リラクス記述と同様、

特定の内容が要因ではないが、企画そのものの存在がよい機会になったことが記述例からも伺える。「赤ちゃん話」は、プラネタリウムの最後に挟んだエピソードである。このように、赤ちゃんの写真や話を入れることで、視覚的・聴覚的に刺激を受けて赤ちゃんへの空想が促進されることが示唆された。これらから察するに、プラネタリウムの空間そのものに加えて、赤ちゃんや家族の星座の解説をすることで相乗的に空想を促すことができたのではないだろうか。「赤ちゃんの動き」は赤ちゃんが企画中に動いたことに想いを寄せたものである。この空想は、赤ちゃんの感情にまで踏み込んでおり、母親としての喜びも内包された記述であろう。母子の一体感を実感する一因にプラネタリウム鑑賞が寄与したことが推察された。

IV. 総合考察

本研究では、マタニティ・プラネタリウムに参加した妊婦が、どのような効果を知覚したのかを解消型の支援、獲得型の支援という視点をもとに明らかにした。

本研究の成果は、第1にプラネタリウム活用の意義が示唆された点である。本研究で研究対象としたマタニティ・プラネタリウムにおいて、複数の参加者はリラクスするという解消型の支援と赤ちゃんや母親としての自分を空想するという獲得型の支援のいずれかを知覚していた。その要因としては、マタニティ・プラネタ

表2 空想記述の分類結果

カテゴリー	数	内 容	記 述 例
赤ちゃん写真	8	赤ちゃんのスライドショーから	実際の赤ちゃんの映像があって実感がわきました。
星 座	6	星座の話から	家族をテーマにした星座の話で。
企画全体	6	全体的な企画内容や雰囲気から	普段、仕事と長男の育児に追われて、おなかの赤ちゃんのことはなかなか気にしてあげられないので、こういう機会はとてもありがたいです。
赤ちゃん話	5	最後の赤ちゃんが母親を選ぶ話から	最後の「赤ちゃんがお母さんを選んだ」あたりのお話に感動しました。
赤ちゃんの動き	2	お腹の赤ちゃんが動いたから	お腹の子どもは演奏を聴いてよく動いていました。

リウムの企画があることで日頃できない体験の機会が得られること、プラネタリウムで星を眺める空間にいたこと、赤ちゃんや親子に関する星座の話があったことなど、プラネタリウムでなければ実現できないことが含まれていた。さらに、リラックス記述の中に「音楽」、空想記述の中に、「赤ちゃんの写真」や「赤ちゃんの話」があったことから、プラネタリウムはプログラムの構成次第で、獲得型の支援の潜在可能性を有していることが示唆された。このように、プラネタリウムは、星が見られる空間の魅力に加えて、参加者の視聴覚に訴える多様なプログラム構成を可能にする特徴において、子育て支援における活用の可能性を感じさせる。

第2に、子育て支援へのアクセシビリティについて1つの方策を提示した点である。前述したように、支援を必要としている人が支援の場に来ないという課題を解決するためには、参加を呼びかける段階では支援を強調しないが、結果的に支援を感じるような取り組みが必要であると考える。今回のマタニティ・プラネタリウムでは、星を眺めてリラックスしてもらうことを掲げて参加者を募った。しかし、赤ちゃんの写真、赤ちゃんの話、赤ちゃんや親子に関連する星座のプログラムを意図的に構成した結果、結果的に獲得型の支援にも一定の効果が見られた。つまり、参加しやすい呼びかけで参加者を募るが、プログラムを工夫することで知覚してもらいたい支援を提供するという方策は可能であると考えられる。このような方策は、妊婦を対象としたものに限らず、すべての子育て支援に共通して実施できるものであり、支援を必要としているが支援の場に行くことは躊躇している人のアクセシビリティを高めることができるだろう。ただし、注意しなければならないのは、呼びかけの内容と実際の内容が異なりすぎる場合、「話が違う」と不満を持つ参加者が出かねない。その点、実際に知覚してもらいたく組む子育て支援の内容と参加者のアクセシビリティを高めるための呼びかけを吟味しなければならない。今後、様々な子育て支援の取り組みにおいて、このように提供者の意図と参加者

の知覚した支援との相違、という視点から、参加者主体の子育て支援を考えていくことが求められるのではないだろうか。

これまで成果を述べてきたが、本研究はあくまで子育て支援の一つの取り組みを分析したものであり、限定的な結果にすぎない。参加者がマタニティ・プラネタリウムで支援を知覚したことによって、実際の生活で何か変化したのか、出産後につながる支援だったのかなど、効果検証としては不十分なところがある。しかしながら、妊婦への子育て支援の重要性、ならびにすべての子育て支援が抱えている課題に一つの方途をもたらす資料として価値はあるのではないかと考える。今後も子育て支援の効果とアクセシビリティに注目して研究を進めていきたい。

引用文献

- 1) 安藤智子・無藤隆 (2008) 妊娠期から産後1年までの抑うつとその変化－縦断研究による関連要因の検討－. 発達心理学研究, 19(3), 283-293.
- 2) Barrera, M. Jr. (1986) Distinctions between social support concepts, measures, and models. American Journal of Community Psychology, 14, 413-445.
- 3) 長谷川直義 (1968) 心身医学的にみた妊婦の特徴. 臨床精神医学, 2, 1155-1160.
- 4) 堀口美智子 (2005) 妊娠期のペアレンティング教育－ジェンダーと発達の視点を組み込んだ米国のプログラムの考察－. F-GENSジャーナル, 4, 13-20.
- 5) 堀口美智子 (2010) 「前向き子育てプログラム」の実践を通じた地域子育て支援の試み. 淑徳短期大学研究紀要, 49, 83-93.
- 6) 石橋雅子 (2011) まちづくりの現場 八千代市の子育てしやすいまちづくり－地域子育て支援センターと連携した母子保健事業の展開－. 保健師ジャーナル, 67(2), 134-138.
- 7) 片岡啓子 (2004) 妊婦にリラックスできる時間を－マタニティ・プラネタリウムに取り組んで－. 助産雑誌, 58(7), 50-55.
- 8) 川喜田二郎 (1970) 続・発想法－KJ法の展開と

応用. 中央公論社.

- 9) 松井剛太・水津幸恵 (2011) マタニティ・プラネタリウムのプログラム開発に向けた実践. 香川大学教育実践総合研究, 23, 19-32.
- 10) 村上碧海・松下姫歌 (2009) 「空想」の理論に関する考察. 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 8, 149-160.
- 11) Person, E. S. (1995) By force of fantasy: How we make our lives. Basic Books. 浅尾泰訳, 岡昌之訳. (1997) 人はなぜ空想するのか. 翔泳社.
- 12) Rubin, R. (1984) Maternal Identity and the Maternal Experience. 新藤幸恵・後藤桂子訳 (1997) 母性論-母性の主観的体験-. 医学書院.
- 13) 澤津まり子・立石あつ子・柴川敏之・秋山真理子・堤幸一・笹倉千佳弘・田中誠・山根薫子 (2010) 保育学生による地域子育て支援の取り組み-2010年度活動報告-. 就実論叢, 40, 163-172.
- 14) 山縣文治 (2010) 地域子育て支援施策の動向と実践上の課題. 季刊保育問題研究, 244, 6-18.

謝辞

本研究を行うにあたり、さぬきこどもの国の河野裕子さんに多大なご協力をいただきました。また、スタッフとして協力してくれた学生の皆様にもここに記して感謝申し上げます。最後に、マタニティ・プラネタリウムに参加してくださった皆様に深謝いたします。

付記

本研究は、2010年度香川大学若手研究事業の助成を受けて行われた。